

根井雅弘著「シュンペーター」講談社学術文庫、講談社 2006年1月10日刊を読む

1893年秋、10歳のシュンペーターは、ウィーンのテレジアヌム(貴族階級の子弟の教育機関)に通い始めた。彼は、この学校でも、卓抜な語学力(独・仏・伊・英の現代語からラテン・ギリシャの古典語まで)にさらに磨きをかけたが、注目すべきは、彼がいち早く独特の速記術を修得し、幅広い読書から得た知見をノートにとる習慣を身につけたことである。知識欲の旺盛な彼は、大学の図書館にも通い、伝記やボードレールなどを好んで読んだ。また、政治的に目覚めるのも早く、すでに17歳のときには、マルクス主義や社会主義の思想にも触れていたという。シュンペーターの評伝を書いたR・L・アレンは、テレジアヌムでの教育について、次のように述べている。「テレジアヌムは、ヨゼフに知識を大いに尊重することを教えた。過去の偉大な人々を尊敬する分、彼は知的な怠け者や平凡な学生に対する同情をあまり抱かなくなった。彼は、彼ほどの能力をもたない人々に対する寛容を学んだが、理解するために努力しない人々に対しては不寛容であった」と。

P16～17

[コメント]

「企業家精神」「イノベーション」「創造的破壊」の主唱者である経済学者、シュンペーターの10代前半の勉強の様子。「速記術」とは「ノートの取り方」。「幅広い読書」から得た知見をノートに取る習慣を身に付けていた。10代前半から大学の図書館に通い、伝記を読む。自らの力で「理解するために努力をする」ことを尊ぶ。参考になることが多い。

— 2012年5月15日 林 明夫記 —